

あまりにも遅い日本のワクチン接種

はじめに

新型コロナワクチンの日本の人口に占める接種者の比率はおおよそ1%で、世界のワクチン接種率と比較して大幅に低いことが指摘されています。日本政府は当初6月末までに全国民に提供できるワクチン確保を目指す」としていましたが、その目途は未だに立っておらず、「日本はワクチン戦争では敗戦した」という声もあがっています。

4月12日に開かれた衆院決算行政監視委員会で、菅義偉首相は「6月末までには少なくとも1億回分を確保できる見通しで、医療従事者と高齢者の2回接種に十分な量であります」と新型コロナウイルスワクチンの確保について述べました。

この発言は、日本国民には十分なワクチンを確保している認識を示したようにも思えますが、政府のワクチン政策について政府関係者の中では「『やっつける感』、『闘ってる感』を出しているものの、日本はワクチン敗戦国ですよ。本当のことを正直に国民に示し、説明するべきである」との声も上がっています。

ワクチン敗戦国

「ワクチン敗戦国」とまで言われるには理由があります。日本国民でワクチンを接種しているのは約100万人で、人口に対する接種率はわずか0.8% (4月9日現在) に留まっています。

世界70の国・地域の接種率の比較検討を行ってみると、最も接種が進んでいるのはイスラエルとブータンで、人口の6割以上が一回以上接種を終えています。先進7か国でみると、イギリスが46.6%でトップ。アメリカ32.5%、カナダ15.5%、フランス13.7%、イタリア12.9%、ドイツ12.6%となっており日本とは比較するまでもありません。お隣の韓国は1.95%で52位で、日本はジンバブエ、チュニジアに続いて60位。1%にも満たない日本の出遅れは他国と比較しても顕著です。

日本政府はこれまで米国モデルナ・武田薬品工業、アストラゼネカ、米国ファイザーの3社とワクチン供給の契約を結んだことを公表しています。日本の人口を超える数を確保していると強調し、2月から医療従事者等480万人への優先接種を開始し、65歳以上の高齢者3600万人に対しても、今月12日から優先接種を始めています。

実際は医療従事者の接種も進んでいない

各地域によって若干の差異はあるものの、ワクチンが接種できている医療従事者の割合は実際のところまだ10~20%にすぎず、このワクチン接種の遅れを表面化させないために高齢者も同時並行でスタートしているのが実際のところのようです。

今後、高齢者施設の従事者200万人、基礎疾患のある人1030万人、60~64歳の750万人、さらにはそれ以外の国民のワクチン接種が控えていますが、まだワクチン接種の全体的な見通しは示されておらず、実際の供給量を補償すらしていない概算的な予想数です。

日本国内への供給量を増加させるためにJALの運搬用の飛行機のサイズを大きくしたというニュースがありました。実はこれも4月に入ってからの機種変更です。ワクチンの配送量の確保と同時に配送システムの変更は本来なら2月の時点で行うべきなのです。

政府担当者は、「高齢者の接種がどのくらいのスピードで進むのか、どのくらいの人が打つか、また、ワクチンが供給できる量を踏まえながら、次の段階を検討していく必要があります。今はファイザー社のワクチンが日本で供給されていますが、他の2社のワクチンが承認されれば、供給量が増えるため、それを受けてどうするか検討していきます。」との態度を示していますが、専門家は「本当に確保できるのか不透明」と指摘しています。

政府関係者は、「医療従事者は5月上旬、高齢者分は6月中に供給完了というのが表向きの公式スケジュールですが、またどこかのタイミングで理由を付けて延長していくでしょう。ワクチン接種の完了時期は『未定』というのが実際のところですよ」と述べています。

ワクチン接種の遅れに対する危機感の喪失

ワクチン接種が進む国はどうかワクチンを確保しているのでしょうか。接種率1位のイスラエルは、米ファイザーとワクチン供給の契約を昨年末に結んでいます。イスラエルはワクチン接種に関する重要な医療データをファイザーに提供する代わりに大量のワクチンを先行して手に入れたと言われています。一方3位のイギリスでは、英オックスフォード大と英アストラゼネカがワクチンを共同開発しており、ワクチン開発を行える組織が国内にあったことで確保につながっています。

イスラエルは新型コロナウイルス感染からの回復が遅れると周辺国から隙を突かれる可能性もあるため危機意識が強かったと考えられます。イギリスは国内にワクチンを開発できる環境を維持してきたことが大きく作用しています。さらには訓練を受けたボランティアがワクチンを打てるようにするなど、ワクチン接種に向けて積極的に動いており、政府の危機意識の強さに日本との差を感じます。

このままでは新型コロナウイルス感染者が増えるばかり

今後、日本では感染者数はどう推移するのでしょうか。ビッグデータから推測されたシミュレーションによると、東京都では5月に入ると1日あたりの新規感染者数が500人に達し、累積感染者数は現在の12万6千人から、5月28日までに14万9千人にまで増加すると予測しています。

関西ではさらに増加に拍車がかかりそうで、大阪では5月に入ると1日あたりの新規感染者数が800人を超え、累積感染者数は約6万人から同9万4千人にまで増加すると予測しています。しかも最近の実測値を見ると、9日前後からは、このシミュレーションを上回る数で推移しています。兵庫県、京都府でも同じ傾向が出ているようです。

大阪や兵庫では感染力の強い新型コロナウイルスの変異株の感染が多く報告されており、蔓延が懸念されています。感染者数の増加の原因が変異株であると考えられると、現在感染拡大が落ち着いている東京や神奈川でも現在の生活スタイルでは拡大を防ぐことができない可能性があります。

4月12日には、東京の一部地域などで「まん延防止等重点措置」の適用が始まり、同措置が適用されている地域は6都府県に拡大しました。経済への打撃はますます深刻化することが予想されます。政府関係者は「G7諸国並みに接種が行われてさえいれば、飲食店はもとより経済全体がここまで疲弊したり、生活に困窮する人があふれたりすることもなかったはず。これは日本のワクチン政策の失敗です。」と指摘しています。

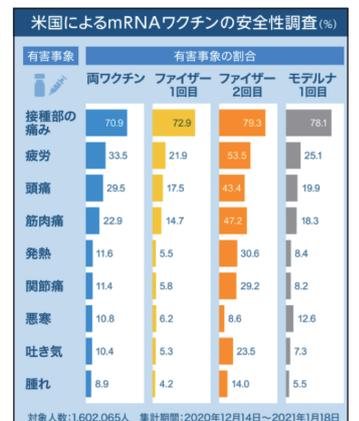
新型コロナウイルスの変異株によって今後も世界で感染者数が増えれば、ワクチン獲得競争はより一層激しくなると見られています。感染者数が増加すれば、東京オリンピック・パラリンピックの開催どころではないため、今が踏ん張りどころと言えるでしょう。

ファイザー社のワクチンの安全性・副反応について

一般的にワクチンの接種後、体の中に免疫ができる過程で『副反応』と呼ばれる事象が生じる可能性があります(※因果関係がある場合は『副反応』、因果関係に関わらず生じたものすべてを『有害事象』と呼びます)。

新型コロナワクチンでも副反応が生じており、米国の諮問機関ではワクチン接種者を継続的に調査し、1月までに約160万人での安全性に関する調査結果をまとめて発表しています。

ファイザー社製、モデルナ社製の両方で高頻度で起こった反応は「接種部位の痛み」で、70%以上に見られました。次いで倦怠感や頭痛など全身への反応、発熱なども報告が上がっています。また、1回目より2回目の接種の方が高頻度で反応がみられました。しかし、それらの反応のほとんどは数日で軽快しています。



日本の先行接種者の報告から

日本では、先行接種の医療従事者が記録した、健康観察日誌の中間報告も公開されています(3月10日時点17,138名の報告)。日本でも同じく接種部位の痛みの頻度が翌日の発生で最も高く(90%)、倦怠感(16%)や発熱(3%)もありました。このことから、少なくとも接種翌日にはなんらかの副反応の出現を予期しておく必要があると思われる。ただし、いずれも平均的に3日間程度で回復が報告されています。